

第6回府中市文化芸術推進計画検討協議会会議録

1 日 時 令和7年8月5日（火）午後3時～午後5時

2 場 所 府中市役所おもや4階 第1特別会議室

3 出席者（敬称略）

(1) 委員8名

小林真理委員（会長）、大平洋介委員（副会長）、小林瑞恵委員、玉村明日香委員、
中村洋子委員、橋本善八委員、鹿島伸明委員、澤井すみ子委員

※ 小野一之委員、新井有佐委員 欠席

(2) 職員8名

矢ヶ崎文化スポーツ部長、平澤文化生涯学習課長、斎藤文化生涯学習課長補佐、
佐々木文化生涯学習課文化振興係長、中司主任、鵜久森事務職員、
江口ふるさと文化財課長、坪井美術館管理係長

4 報告事項

(1) 配布資料の確認

ア 会議次第

イ 資料1 第5回文化芸術推進計画検討協議会会議録（案）

ウ 資料2 次期文化芸術推進計画素案に対する意見対応シート

エ 資料3 次期府中市文化芸術推進計画素案

(2) 前回会議録の確認

各委員に校正を依頼した前回会議録（案）について、市民に公開することが了承された。

(3) 資料説明（事務局より）

第5回協議会の意見を資料2に整理

資料3「素案」の説明

5 審議事項

素案の検討

会長： まず第4章について議論したい。具体的には、資料2に出てくるページ割の構成案、レジリエンスの言葉の扱い方、基本施策の記載順序についてご意見をいただきたい。その後、第5章に入っていきたい。

委員： 8ページに掲載するプラッツの登録団体数は、どのような活動分野の団体数とするか事務局に検討してほしい。

委員： 7ページのアンケート結果欄にはアンケート結果のみを掲載し、本文でアンケート結果に影響を与えた要因について記載するという認識でいいか。

事務局： 認識のとおりである。

委員： レジリエンスという言葉を使うのであれば、単語の説明を補足してほしい。

委員： ページ割を変更しても、計画自体にはそれほど大きな支障はない。また、言葉の入替えもそれほど影響しないと思った。資料3の30ページの「幸福度につながる進行管理」という言葉はこれで良いのか検討したい。事業の進捗管理については、新しい計画を作るときに参考にできるもの、残しておくべきものをこの検討協議会で明確にしてから市で引き継いで検討するのが良いのではないか。この計画の進行もさることながら、次の計画を作るときに何を残すかを含んでおいた方が良いと思った。

委員： 表紙の「つむぐ、ふれる、はくくむ、つながる」に関して、上位計画である第7次府中市総合計画における都市像と関連していることが分かるようにしてはどうかという提案をしたがどうなったのか。また、4つのキーワードがどこから出てきたのかお聞きしたい。

会長： キーワードは、この会議の中で、みんなで作ったと認識している。

委員： 今回新たに決めたことなので、上位計画にこだわらなくて良いということか。

会長： そのとおりだ。

キーワードについては、「つなげる」の方が良いのではないかという意見と、順番を「ふれる」から始めた方が良いのではないかという意見が出ている。事務局としては、「つむぐ、ふれる、はくくむ、つながる」を使いたいという説明があった。順番については、この場で議論したい。

委員： 第7次府中市総合計画の都市像として「きずなを紡ぎ 未来を拓く 心ゆたかに暮らせるまち 府中」があるので、文化芸術推進計画でも継承してやっていく話であると認識している。第7次府中市総合計画とのつながりはゼロで全く関係ないということなのか。

会長： 関係性はゼロではなく、第7次府中市総合計画を踏まえた内容にはなっている。また、他の関連する計画との整合性は別のページに記載されている。今は、施策の順番はこのままで良いのかについてご意見をいただきたい。

委員： 目次と順番はこのままで問題ない。

委員： 目次については前回から変更になっており、まとまっている。

第5章の「幸福度につながる進行管理」の言葉が気になる。

新しい外来語は、国や都が使っていくことで認知されていくものだと思う。例えば、「コミュニケーション」や「サービス」という言葉も徐々に使われるようになってきた。そのため、「レジリエンス」という言葉を使うことは賛成だ。「レジリエンス」に限らず、府中市で新しく取り入れる用語については、注釈や用語集で補足すると親切だと思う。

副会長： ページ割りは、この素案の流れで特に違和感はない。

「ウェルビーイング」は簡単な注釈を入れた方が良い。また、他のページに出てくる「シビックプライド」「レジリエンス」も同様に注釈を入れた方が良い。

また、「つむぐ、ふれる、はくくむ、つながる」については、提案のとおり「つむぐ」を「つなげる」に直すのが良いのではないか。その場合は表紙のタイトルも一緒に変える必要がある。

会長： 事務局に確認だが、「つむぐ」は残したいという理解でよいのか。

事務局： 「つむぐ」としたい。

会長： 並び順の変更についてはどうか。

事務局： 変更した方がつながりが良いのであれば並び順は変更したい。

会長： では、並び順については変更することとしたい。

ページ割りについては、事務局としては、これから実施していく計画の内容に重点を置いて記載したいという意図で今のままの目次構成にしたいと考えているようだ。調査や評価に関しては資料編に持てきたいということだったが、その方向性で良いか。

一同： 異論なし。

会長： 委員の皆さんから指摘のあった言葉については、注釈や用語集で補足するなどの対応をしてほしい。

委員： 資料3の表紙について、今は、「つむぐ、ふれる、はくくむ、つながる」の関係が三角形の配列になっており、「つむぐ」が上位にあるように見えてしまう。そのため、円で循環するようなイメージで書くと良いのではないか。

会長： 素敵な提案だ。それがよいと思う。

委員： 「レジリエンス」は国際社会でも普通に使われる言葉なので、注釈を付けて使い、知ってもらうことが大事だと思う。

第4章は書いていることが矛盾している。

12ページの目指す姿で使われている「郷土を愛する心」という表現について気になった。これは、元々ふるさとが府中である人達を前提にした言葉なので、新しく移り住んできた人々に対する包摂性が弱いのではないか。目指す姿は、「長い歴史の中で培われた歴史的文化遺産について市民一人ひとりが学び、理解を深めることで、府中に住むことへの愛着や誇りが育まれています」や、「世代や在住年数を問わず市民が学び理解を深めることで、府中の文化に対する誇りや愛着が育まれています」のように記載して、新しく府中に住み始めた方も含んだ表現にすると、現状と目指す姿の一貫性があって良いのではないか。

会長： 重要な指摘だ。郷土という言葉で思い描くものが固定的だったのではないか。今の指摘のように修正することとしたい。第4章は事務局で修正してブラッシュアップしてほしい。

それでは、第5章の推進体制などの進行管理の部分について、どうすべきかご意見をいただきたい。特に、多様な主体との連携や新たに協議会を設置するかどうかは目玉になるので、その点も含めてご発言いただきたい。

委員： 30ページの「幸福度につながる進行管理」について、管理をするものなのか。表現について違和感を持った。ステップの方が適切か。

28ページの推進体制の図は、イメージとしては、文化芸術団体が中心にあり、周りを各団体が取り囲んでいるという解釈で良いか。協働というワードを使っているが、文化芸術の推進につながるということであれば、それぞれの団体からも矢印が出ている方が適切ではないか。協働では、それぞれが対等な立場でコラボしたり、一緒に良いものを作っていくことがあるので、それぞれの得意を生かして次の体制を作っていく

ことが分かりやすい図にした方が良かった。

会長： 推進体制を具体的に動かしていくのが（仮称）協議会になるのか。

事務局： そのイメージだ。

会長： それぞれの団体から選出した人と共に、府中市や財団が運営していくということか。

委員： 30ページは、「進行管理」という言い方が馴染まない。今までの議論の中で、「幸福度」は「幸福感」になってきている。ここは「幸福度」で良いか。

会長： この計画を進行管理することで、より良い形で文化振興を図っていくことが重要だ。その上でロードマップを作っておかないと、計画に携わる人たちが分からなくなることもあるので、その視点で考えていけると良い。

また、以前の協議会で指摘があったが、指標などを細かく書き過ぎることで、途中で変更があったときに柔軟性を欠いてしまうことがある。そうならないようにするためには、どのレベル感で書くのかも重要な視点である。

委員： 5章については、客観的な情報に基づいて検証していくことが重要だ。情報発信をして計画を市民に広めることで、インスパイアされて地域で取り組んだ成果を吸い上げる仕組みや体制を作ることが重要である。情報発信していく仕組みや、誰からどのように情報を吸い上げるか、どの層に対して集中的に意見を聞くかを共有し、計画の中で触れることができると良い。

委員： 28ページの推進体制マップは、財団と府中市が分かれているように見える。今回の審議会に参加して分かったが、府中市が直営でやっているものと、指定管理やPPPやPFIなど、財団等にアウトソーシングしているものがある。市と文化振興財団は一括りで丸をしておいた方が良いのではないか。

また、30ページの進捗管理は、計画に関する進行状況の確認から始めるということなのか。この図では、順番がC、A、P、Dとなり、分科会が進行状況をチェックするように思えてしまうがそれで良いか。この図だけでは、フローが見えない。

委員： 漢字・文字が多いので、一般の方々が目を通すのか気になる。

推進体制マップのイメージは、府中市を中心にして、財団が連携強化のような形で、軸を持って回していく方が分かりやすいのではないか。市民や芸術家・アーティストが連携しても、それは個人での連携になるので、核となる団体が連携を強化してプロジェクトを回す方が軸としてはふさわしいのではないか。また、それを取り巻く連携のまちづくり関連団体や事業者については、イメージをもう少し整理した方が良いのではないか。

PDCAサイクルはロードマップとワンセットのイメージがある。テキストではなくグラフとかで表現するのはどうか。30ページは漢字が多いが、仕方ないことなのか。

会長： 市の公文書であり、職員が計画に基づいてやっていくための資料とい

う側面もあるため、しっかりと文章で記す必要がある。文字が多いのは仕方ない部分がある。そのため、概要版を作って分かりやすくする方法がある。他の自治体では、子ども向けの概要版を作った事例もある。主体は市民なので、伝えたいことを分かりやすく表現する方法を考えなくてはならない。

委員： 30ページの「2. 幸福度につながる進行管理」について、見出しの案を考えた。ここでは、文化芸術施策の推進と進行管理の重要性を語っており、幸福度を直接的な主題にはしていないのではないかと。そのため、見出しが唐突で内容にずれがあるように感じた。幸福度については別の章や総論で語る方が自然ではないか。オーソドックスに内容と合わせると、「文化芸術施策の進行に向けた進行管理」や、「文化芸術を街に根付かせるための推進体制」といった見出しにする方が自然ではないか。

会長： 具体的な提案だ。その方が分かりやすいと思った。

副会長： 前回の文化芸術推進計画に比べてより具体的になっており良い。

28ページのマップの見せ方は再考の余地があるが、この計画の推進に向けてどの団体関わっているか見やすく出ている。特に29ページでは、その団体がどんな団体で、どんな役割を担っているか分かりやすく書かれているので、初めて計画を見る方にも分かっていたのではないかと。推進体制マップの図の順番と表の順番が合っている方がより分かりやすい。

30ページの見出しについては、皆さんのご意見のとおりタイトル自体を考えないといけない。進捗管理のイメージはこれで分かりやすいと思う。令和8・9年度の結果を10年度に調査し、足りないところを分科会で検討・推進していくと理解した。個人的には、PDCAの考え方が反映されていると感じた。

その下の「数値指標による定量評価」はこの8つで良いのか気になる。他にないのか。例えば、くらやみ祭りの来場者数など市の事業ではない物を指標にするのは難しいか。市民芸術文化祭の参加者数とは、参加団体数や出演者数ということか。府中囃子及び武蔵国府太鼓の認知度はどのように測るのか気になった。

会長： 推進体制マップにおける府中市と財団の書き方は検討してほしい。財団に新しい機能、例えばアーツカウンシル機能などが追加されており、負荷が増えているが大丈夫なのか。財団の在り方が問題になり、組織変革や廃止した自治体もある。府中市では財団を存続させる方針なのか、そのために財団にやってほしいことは何なのか、事務局の考えを聞きたい。

事務局： これまで、府中文化振興財団は府中の森芸術劇場や郷土の森博物館を拠点に事業を展開してきたが、令和5年度及び6年度の休館期間中にまちなかでの活動が増えたことでアウトリーチ活動のノウハウが蓄積されたと認識している。そのため、財団には、施設に閉じこもっているのではなく、市内の文化振興に影響を及ぼす存在になってほしいという気持ちが当課としてはある。それをアーツカウンシル機能として表現した。アーツカウンシル東京のように金銭的援助をどんどん行っていくのは市の予算感もあ

るので難しいかもしれないが、機能としては、ここに書かれているようなネットワークを生かして市民からの相談に乗ったり、団体と団体をつなぐといった活動をしていただきたいと思っている。

会長： 施設管理や公演を持ってくるといったことは民間でもできるので、財団には、これまでやってきたことに加えて、新たなことに挑戦してもらいたい、府中の文化団体の活動を支える存在にシフトしていったほしいという市の思いがあるように見える。それを財団として受け入れられるのか。

進捗管理のイメージについて、進捗管理のための調査をこのために追加でやるということか。既にあるデータでチェックするならば、あえて「調査」という文言を入れておく必要はないのではないかと。定量評価は、毎年度の事務事業評価の指標を使うようなので、進捗管理にもその辺りを書いた方がよいのではないかと。

活動主体の関係機関も、このような形で関わってもらいたいということの良いのか。

委員： 30ページの「2. 幸福度につながる進行管理」について、見出しの変更はあると思うが、なぜ進行管理という言葉になったかは理解した。

推進体制作りについては、様々な人や団体をつなぎ、コーディネートするような人達が必要だと思った。市民活動センタープラッツも、間に立ってコーディネートしていたりする。

会長： とても重要なことだ。プラッツは市民活動という広い範囲になっているが、計画の推進体制はプラッツの芸術版というイメージか。

事務局： 事務局の中では、この計画に記載する具体的な活動については市が行うものしか書けないのではないかと考えている。推進体制には多様な方々に加わっていただきたいが、その方々が計画を踏まえてどのような活動をするかということは、市やこの検討協議会の中では具現化できない。そのため、それぞれが計画の内容を踏まえて実施した内容や、計画の中で足りない部分を調査と分科会によって吸い上げるイメージで作成した。3回の分科会で進捗管理を行った上で、8年後の次期検討協議会で、それまで分科会での議論を踏まえて新しい計画策定の検討をしていくことを想定している。

会長： 先ほど出た、それぞれの活動が情報として収集される話につながる。市に報告するようなものではない独立した活動は自由にやらしてもらえば良いが、一方で市は、積極的に団体とつながることをイメージしている。そうすると、各団体の取組等の情報を吸い上げるためには、このような協議体があると良く、お互いに情報共有してネットワークを広げやすくなるのではないかと。

委員： まだ28ページの推進体制マップがどういう形になるか想像できないが、市民・芸術家・文化芸術団体等は周りの全部にそれぞれつながるのではないかと。また、点線は府中市内を表しているのか。市外の教育機関、地域活動団体、事業者とのつながりもあるので、分け方をどうするかは難しい。

まちづくり関連団体や文化振興財団が、文化・芸術活動を行う方々の間に立つ存在としての役割を担っているのではないかと。

30ページの見出しだが、「幸福度につながる進行管理」は落ちつかない。また、2番の数値については他にも挙げだすときりがなくなってくると思う。5章より前でも書かれているので、どれを取り上げるか考えた方が良いのではないか。

会長： 例えば、まちづくり関連団体や民間事業者が関わりながら、文化芸術の領域で「やってきていること」、「やれること」、「やりたいこと」をイメージ図として明示しても良いのではないか。

文化芸術基本法と同時に障害者文化芸術推進法と一緒に施行され、すべての人に文化芸術に触れたり、参加したりできる場所を作っていくという方向性が示された。これまで排除されてきた人達がいるということ認識し、障害者団体、福祉団体、子育て団体など関わって、新たな文化芸術に触れる機会を作る取組を行い、文化芸術分野をより良くしている事例がある。そのような先行事例を踏まえ、府中市の推進体制では、今まで取り組んできたことや、強化したいことを書いても良いのではないか。例えば、商工会と一緒にやることで敷居を下げ、文化芸術をより身近に感じてもらえたという事例がある。府中市でも、けやき並木などでやっている事業があると思うので、その辺りを見せると良いのではないか。推進体制としてやりたいことにつながると分かりやすいと思った。

委員： 先ほど、概要版を作ると良いという発言があったが、作る予定はあるのか。

事務局： 作成する。

委員： 概要版はあると良い。この計画の骨子が分かりやすく伝えられるようにして、様々な所に普及できれば良いと思う。推進体制は、この計画を実行していく上で最も重要な部分であると認識している。

28ページの「計画の推進に向けて」において府中市と文化振興財団が分かれているのは、組織が違うからだ認識している。府中市美術館は直営なのでここには記載がないが、財団は市の外郭団体であり、市が業務委託する形で文化振興を行っている。

市として何がしたいかがはっきりしないと推進体制を作れない。設置者としての責任感もとても大事なことだ。今度の推進体制をどういう風にしていくか考えたときに、府中文化振興財団のどこをどのように活用していくか考える必要がある。

美術館が蓄積している府中に住んでいる様々な若いアーティスト達の情報を活用してまちづくりを進め、市民とアーティストが触れ合う場を作っていくことが重要である。

推進体制の協議会はネットワークを作ることが目的であって、行政や財団の職員に対して文句を言う場ではなく、建設的な意見交換をする場であることを共通認識として持ちながら会議を充実させていくことも、連携についての広報の一つになるのではないか。現場の人達の活動に関する意見を吸い上げることが重要だ。友の会の人たちなどのコアのファンの人たちがどう感じているのかなどの意見は重要であり、そのような人達とつながって仲間になってもらうことも重要ではないか。

会長： 事業を市が財団に任せたことで、市に責任を持つ能力や事業を発展す

る力がなくなってしまったという事例があった。また、昔から同じようなことを続けた結果、年齢が高い人には支持されているが、若い人達の文化活動の底上げや活性化に目が向いていないように見える事例もある。若い人達は、eスポーツのような、アートなのかスポーツなのかははっきり区別できない領域にも関心があり、色々なことをしている。

府中市のこれからの文化振興を皆でどうやって行っていくのかを考えると、市だけではなく、財団にも変わってもらわないといけないことがある。また、実際に行うのは市ではなかったとしても、市が常に責任を持ってやっていくためには、ロードマップをどのように描くかが重要だ。現場で人を集めて様々な取組を行いながら、アーティスト達がつながってWin-Winの関係になるようなまちづくりが展開され、結果的に府中の文化を豊かにすることにつながれば良いと思う。進行管理でそのことが明確になれば良い。

委員：　ここで一番大事なのは、市として実行計画が載っていることだ。例えば、8年間使ってやるのか、すぐできそうなものは3年でやるかななどを29ページで主体ごとに表現すれば良い。

協働の仕組みを今までと違う形で考えていかないといけない中で、今の絵だと市民には伝わらない。今後、8年かけて目指す姿に到達するためには、重点的にやらなければいけないことを明確に示し、市の職員、市民、指定管理者など皆でPDCAを進めようと宣言しないとけないと思う。推進体制マップの中に記載されている各機関・団体がどんなことをやっているのかを3行程度で書いた上で、これから何をするかの宣言のようなことを記載できると良い。これまでの成功事例も入れると、やるのが分かりやすくなり、一緒にやろうという気になるのではないかな。

会長：　推進体制の図の中心に、市民・芸術文化団体等と書いてある。そして、その周りに地域の活動団体、まちづくり団体、事業者とあるが、実はこの人達も市民や市内の団体だったりする。そのような役割が重複している人達のこととはどう受け取れば良いのか。事業者も、大きい事業者なのか個人商店なのか。どのように捉えれば良いだろうか。

委員：　東京藝術大学の日比野先生が提唱した「文化的処方」という概念がある。文化的処方は、「人と人とのつながりや地域資源の活用によって健康やウェルビーイングを地域や社会部分で高めようとする取組です。文化的処方文化・芸術を活用する社会的処方一種です」と説明されている。「文化的処方」は東京藝術大学の登録商標だが、趣旨に沿った利用であれば自由に使って良いとされていることから、文化的処方をロードマップに取り入れている自治体もある。

推進体制は、府中市がしっかりとした核を持ち、外部の人達と柔軟に連携していけたら良いと思う。そうになると、枝分かれ的に障害者など福祉関係の人にも参加してもらえるのではないかな。時代ごとの変化を柔軟に対応する上で、核がしっかりしていれば、体制はどのようにもできるのではないかな。

府中の街を歩いて、より良い方向へ変わったことが分かるようになる

と良い。府中市の改札付近はウェルカムムードが無い。その対策の一つとして、府中市美術館のポスターや、芸術劇場でのコンサート情報を駅構内に掲示できたら良い。そうすることで、改札を出るまでに市の主要となる何かしらのPRができるのではないかな。街を歩いている人に「変わった」と気付いてもらうことが大切だと思う。

委員： 28ページの推進体制マップが分かりにくい。地域の活動団体には市民も入っている。紫色で市外の文化芸術団体と書いてあるが、図の中心には市内の芸術家・文化芸術・団体が書いている。青い円は市内と市外を区別しているのか、文化団体等の「等」は何を指しているのかなど、ごちゃごちゃしていて分かりにくい。

マップの上の文章の末尾について、「それぞれの役割と責任において」の「責任」という言い方はきつい印象を受けた。例えば「立場に応じた役割を担い」の方がふさわしいのではないかな。

障害者による文化芸術活動の推進に関する法律ができてから、東京都では障害者の芸術活動の基盤事業をやっている。府中市でも、色々な人達が参加できる仕組みができると良いと思った。障害者の生涯学習について考える会があり、その中で、障害のある人達が文化やスポーツなど色々なものにアクセスしにくい現状を知った。生涯学習は様々な場所で開催されていると思うが、障害のある人をはじめ色々な人達が参加できるように間口を広くできれば良いのではないかな。色々な人達を排除しない仕組みを作りながら協働することはつながりの基盤になるので、大きな意味がある。そのように連携する体制がこの表や文章にあると良い。

副会長： 29ページの府中文化振興財団の役割・動きで記載されていることは既に実施しており、成功に導いている。専門的人材の育成については、20代から30代の職員が成長して中心的な人材になっているし、アーツカウンシル的な役割については、市内の団体に若いアーティストを紹介しつなげる活動を行っているので、「期待されます」と書かれているが、「更に推進していく」としていただきたい。

主催事業は、ほとんど財団職員で企画している。専門家を呼んで企画の検討も行っている。

リニューアルオープンに伴い新たに発足した友の会は、今年度中に休止前と同じ登録者数である5千人を目標に様々な取組を実施し、既に4,100人の登録があり、劇場を支持していただけていると認識している。夏休みの時期は大変にぎわっており、稼働率が100%のホールもある。また、府中駅のペDESTリアンデッキには府中の森芸術劇場の掲示板があるので、駅での周知を全くやっていないわけではない。

会長： 財団の自己評価は分かった。内部的に処理されてしまって評価されないのは残念なので、良い取組を積極的にアピールした方が良い。財団にしかできないことがあるので、既に取り組んでいるものは中間報告書などで外部に見せていった方が良い。

委員： 駅を使う人からすると殺風景なので、駅を下りてくれる仕掛け作りが必要ではないかな。自ら情報を取りに行かなくても、行き来している人が行ってみようとなるように視覚的に伝えられるとよいのではないかな。

会長： 色々な所と連携して文化の豊かな街と認識してもらうためには大事な
ことだ。相手に、協力や連携できると思ってもらうことが大事なので、
どういう風にやっていくか考える必要がある。

委員： 利用客があれば、鉄道事業者側にもメリットがあるのではないかな。

会長： 府中市美術館は多摩地域の美術館の中では充実している施設だと思う
が、すこし内向きな印象がある。市外とも連携し、市外の人にもっと来
てもらうという発想があっても良いのではないかな。

推進体制マップでは、地域の活動団体やまちづくり団体などとぼやか
すのではなく、もう少し具体的に書けると良い。どのような視点で文化
を広げるかを書いても良いと思う。基本的な施策はこれまでやってきた
し、これからもやっていくと認識している。その上で、今度の計画では
「推進体制を重点的に構築するように努力する」とし、推進体制作り自
体を重点施策として記載しても良いのではないかな。

委員の皆様には、追加で意見があれば事務局に提案していただきたい。
また、今回欠席した委員からも意見をいただくように事務局をお願いし
たい。もらっておいてほしい。

6 その他

次回の府中市文化芸術推進計画検討協議会の日程を報告し、了承を得た。